



障害のある人のスポーツへの多様な参加を支援するために

障害のある人のスポーツ参加支援推進委員会

第3回 委員の紹介とアンケートのお願い

当委員会では、障害者スポーツに関する現状や作業療法士が実際に寄与できる側面などの情報を提供していくことが必要であると考えている。そこで、第3回と第4回では、委員の障害者スポーツに係る活動を紹介する。また、作業療法士の障害者スポーツへの継続的な関わり方を模索するため、会員の皆様に障害者スポーツへの関わり等のウェブアンケートを行っている。ぜひ回答にご協力をお願いしたい。

作業療法士だから引き出せるスポーツの力

NPO 法人キッズスポッチャ・株式会社空色 津田 憲吾

2020年東京パラリンピック競技大会まで残り約1年となり、各種メディアでパラリンピックが取り上げられる機会は格段に多くなっている。2014年に実施された日本財団パラリンピック研究会の調査によると、パラリンピックの認知度は98.2%であるにもかかわらず、障害者スポーツの直接観戦経験のある者は4.7%にすぎず、障害者スポーツ全体への認知度の低さが窺われた。また、笹川スポーツ財団の調査(2012年)によると、障害児・者が参加している総合型地域スポーツクラブ^{注1}は約3割(30.6%)であり、障害児・者を受け入れるスポーツ環境が未整備であると報告されている。

私は「NPO 法人キッズスポッチャ」という、障害があるお子さんを対象にした団体の活動に2010年より携わっている。また、本団体では障害がないお子さんと障害があるお子さんとの合同教室や、大分国際車いすマラソンへの協力(エスコートキッズ)、障害者スポーツ啓発イベントなど、社会とつながるための企画も積極的に行っている。

障害があるお子さんは、移動等に介助を必要とすることが多く、物理的に生活空間が限定されているため、同年代の障害がないお子さんと比較すると、放課後や休日に諸体験をする機会も大きく制約される。そういう生活の中で「スポーツ」に参加することで、普段接している家族や学校の先生、リハビリテーションスタッフに加え、同年代の障害があるお子さんとの交流も可能となる。障害があるお子さん

の生活空間は拡大し、身体を動かす機会が増えると考えられる。また、社会とのつながりをもつことで、社会で自立する意欲と社会性の獲得につながっていくことも期待できる。効果が期待できるのは、障害がある子どもたちのみではない。参加した障害がないお子さんとサポートスタッフにとっても、障害の有無にかかわらず、純粹に感動し同じ立場で物事に取り組むことは、ノーマライゼーション理念^{注2}への足掛かりになる。特に、子どもの頃より対等・平等の環境の中でスポーツを体験するこのような経験を重ねることが、障害があるお子さんや大人をより良く理解する啓発活動になると期待している。

『五体不満足』の著者であり、スポーツライターとしても活躍されている乙武洋匡氏は、著書の中で、



イベント集合写真

注1：多種目・多世代・多志向をキーワードに地域住民が自主的・主体的に運営するスポーツクラブ

注2：ノーマライゼーション理念：障害者と健常者とは、お互いが特別に区別されることなく、社会生活を共にするのが正常なことであり、本来の望ましい姿であるとする考え方

参考文献 ・ 日本財団パラリンピック研究会：「国内外一般社会でのパラリンピックに関する認知と関心」報告書，2014。
・ 笹川スポーツ財団：平成24年度文部科学省「健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業（地域における障害者のスポーツ・レクリエーション活動に関する調査研究）」報告書，2012。

子どもの頃に友だちと遊ぶ際には「乙ちゃんルール」なるものが存在したと記す。著者からは、このルールは既存のルールを柔軟に変化させる特効薬であり、使用したことにより友だち全員で遊んでいた様子が窺える。障害があってもなくても、誰もがそれぞれの幸せを手にするためには、「乙ちゃんルール」のように、互いが柔軟に物事を受け入れていく姿勢が

大切なのではないだろうか。

私は、作業療法士がスポーツに関わることで、この柔軟な姿勢を構築する一助となると考える。「その人らしさ」を引き出し、「人と人」を結び、「人と地域」を結びつける。これこそ作業療法士だから引き出せる「スポーツの力」ではないだろうか。

フットサルで日本一を目指す

県立広島大学 織田 靖史

「なんか、日本一目指したくない？」デイケアの更衣室で誰かが発したその一言が、きっかけだった。当時、バレーボールは全国精神障害者スポーツ大会で精神障害唯一の公式競技であり、私がいた高知県では、龍馬クラブという日本一の経歴をもつ、精神障害者のバレーボールチームがあった。障害者スポーツで日本一を目指すのなら龍馬クラブに加入するのが手取り早い方法かもしれない。しかし「新たな分野で日本一になりたい、その可能性を切り拓きたい」。そうした思いからフットサルを選んだ。

「障害者が参加できるフットサルチームを作ろうと思う」。私はいろいろなところで口にした。とはいえ、どうやってその思いをかたちにしていくのか？勤務先の医師や同僚の作業療法士らが応援してくれるものの、障害者が参加できるスポーツチームを作った経験のない私は、「本当にできるのだろうか」とその方法に悩んでいた。

そんな時に「やったらいいよ。意外とやれるから。楽しいよ」と既に愛媛県でチームを立ち上げていた木村医師らが、障害者スポーツチームの作り方、運営に関する知識を教えてくれた。愛媛県のチームは、その知識を龍馬クラブに教わったとの話を聞き、こうして見えないところでつながっていることを実感した。自分が想像したものがだんだんかたちへと変わっていき、フットサルで日本一を目指す CitRungs Tossa (シトラングス・トッサ) が誕生した。

それからは、怒涛のごとく時が流れた。初遠征は大雨のなか、片道6時間かけて会場へ行き滞在時間は約1時間半。しかし、そんな過酷な状況でも誰も体調を崩さない。好きなことはひとを元気にする。チームは、大会に出場するまでに成長し、2017年全国大会でフェアプレー賞に輝いた。チー

ムは“してもらう”だけでなく“する”存在に成長し、他の障害者スポーツや地域のイベントなどにスタッフ補助やボランティアとして参加した。一般の人たちとも一緒にボールを蹴った。公益財団法人日本レクリエーション協会の文部科学省委託事業「平成26年度健常者と障害者のスポーツ・レクリエーション活動連携推進事業」(地域のスポーツクラブにおける障害者スポーツの導入)にも参加した。高知大学看護学部のオープンキャンパスにブースを出し、障害者スポーツを広報する機会もいただいた。これらの背景には、多くのひとの思いがあった。特に、障害者スポーツセンターの方々、総合型地域スポーツクラブ「総合クラブとさ」の皆様にはお世話になった。日本ソーシャルフットボール協会(精神障害フットボール競技の団体)の方々にもいろいろなことを教わり、多くの励ましもいただいた。そして、四国リーグの結成につながっていく。四国リーグの開催にあたっては4県の代表が集まって運営することとなり、四国は選抜チームで全国大会に出る。選抜チームのユニフォームは選手の選ばれた誇りでもある。選手・スタッフ・チームを応援してくれるひと。誰もが言葉や行動…いろいろなかたちでチームを築き上げ、支えている。私が高知を去った今も、チームの活動は続いている。

そして私は、今、広島県にいる。ここには既にフットサルのチームができており、文化が生まれている。どんな小さなことでもきっかけになる。結果にはつながらないこともあるかもしれないが、「すること」で私は元気になれるし、誰かとつながっていける。私にとってスポーツは「すること」の1つとして魅力的なのである。

【障害者スポーツにおける会員の関与実態調査(2019)】ご協力をお願い

協会の障害者スポーツに対する関心や関与等、状況を把握させていただくためのアンケートです。下記のURLもしくは、QRコードを使ってアクセスしてアンケートにご回答ください。ご協力をよろしくお願いいたします。(回答期限9月20日)

<https://forms.gle/6EW5iGLD3FHq2Qvy6>

